

ベーカー街222B。

それがコナンの下宿先の住所だ。ウエスト・エンドの中心を南北に延びるベーカー街。その222番地の上階である。

玄関のドアを開け、階段を登る。コナンの寝室があるのは建物の三階部分。リビングやダイニング、それに同居人の居室があるのが、二階。

コナンは二階の廊下から、リビングに入るドアを開けた。

「あ、おかえり」

「……おかえり、じゃない」

リビングの椅子に座っていたのは、サイズの大きいシャツに、サスペンダーで吊したストラップという姿の少女だった。中央のテーブルにはキャスケット帽が放り出されており、背もたれには脱いだジャケットが掛けられている。まるで男のような出で立ちだが、服装のみならず髪も肩口で切り揃えられていた。

歳は十八。コナンより三つ下だが、もう少し幼く見える。眼鏡を着用しており、そのレンズの奥では、いかにも活発そうな瞳が、コナンに向けられていた。

「いいかね、ミス・ハドソン。いくら大家の孫とはいえ、未婚の女性がそう度々、独身男の部屋に入り込むんじゃない」

「いつも言ってるけど、名前でもいいわよ。マリーで。ミス・ハドソンばかりじゃ、コナン君だって紛らわしいでしょ?」

「……『君』は止せ」

「まだ言ってるの? なんでそこ、そんなに気にするかな」

「……俺の方が年上だからだ。他に意味などない」

仏頂面で返事をしつつ、コナンはコートを脱ぎ、コート掛けにかけた。

古いが広いリビングは、苦学生的身には過ぎた、立派な部屋だ。中央に敷かれた色褪せたカーペットに、丸いテーブルと椅子が四脚。暖炉—元暖炉の前に、肘掛け椅子が二脚。食器棚と、仮眠が取れるサイズの長椅子。書き物に使うデスクと、作業机。その他、大小様々な書棚や戸棚が、壁の隙間を埋めている。どれも掃除が行き届き、居心地良く整えられていた。コナンの弛まぬ「整頓」の成果だ。

ただ一方で、細部に視線を向ければ、至る所に「渾沌」がこびり付いているのがわかった。棚からこぼれ落ちそうな書類やファイル。びっしりと並べられた、用途が推測できない歪な

金属部品。逆に、用途は明確だが、なぜそこに飾られているのか理解しかねるガラタたち。

特に酷いのは、オイル染みと焦げ跡が斑模様になった作業机だ。丸まった設計図と、銅線、金属片の他、幾種類ものボルトにナットにネジ。スパナやドライバー、ハンマーといった工具から、定規、コンパス、はたまた薬品入りのガラス瓶などが無造作に置かれている。机の前の壁には書き殴ったメモがナイフで刺し留められていた。

そして、すっかり「改造」された暖炉である。

それはいまでも、低い稼働音を響かせていた。周囲を囲むマントルピースには、ぴかぴかに磨かれた計器が並び、コードとパイプが血管のように張り巡らされている。後者は、暖炉のみならずリビング中の壁を這い、部屋にある様々な機械に繋がられていた。

彼の同居人が息をするように排出する、「渾沌」の結果だ。

「……で？ アーサーは？」

コナンがマリーに尋ねたときだった。

コナンが入って来たのとは別のドア——同居人の居室に続くドアの向こうから、

バチンッ！

と何かが鋭く弾けるような音が響いた。

まるで、壁に向かって拳銃でも発砲したかのようなだが、幸いな事に何が原因かは見当が付いた。いや、幸いでもなければ、具体的に「何が原因」かは不明なのだが、彼の部屋から騒音が響くのは珍しいことではないのだ。彼が自室に居る証拠である。

「……相変わらずか」

コナンは疲労感を漂わせ、手近な椅子に座り込んだ。やれやれと、手に提げていた新聞をテーブルに放り出す。

すると、新聞を見たマリーが「あっ！」と眼鏡のレンズを光らせた。コナンは自らの失敗に気付いて顔をしかめた。

「その記事！ やっぱりコナン君も気にしてたのね！」

「だから、『君』付けは止めてくれ。それに、俺が気にしてるわけじゃない。大学の同期から渡されただけだ」

「ってことは、少なくともコナン君の——」

「呼び捨てで良いから！」

「——コナンの友達は、気にしてるってことじゃない！ 《ジャック・ザ・ナイトメア》の凶行を！」

マリーはテーブルに両手を突くと、鼻息を荒くして身を乗り出した。

「それもこれも、一向に事件解決に乗り出そうとしないからよ！ 我らが名探偵、アーサー・ホームズが！」

両目を爛々と輝かせるマリーに、コナンは閉口する。大家の孫娘から視線を逸らし、ちらりとテーブルの新聞を眺めた。

巷を騒がす殺人鬼、《ジャック・ザ・ナイトメア》。

被害者は老若男女様々で、互いに接点も持つておらず、殺害された時期もバラバラ。一度の犯行で一人のときもあれば、ひと晩で三人が殺されたこともある。場所も、ロンドンとその近郊という大きな括りがあるだけで、これと言った関連性は見当たらない。そのため、標的に共通点がない、いわゆる無差別殺人と目されていた。

ただ、被害者に共通点がない一方、その犯行には幾つかの共通点があった。

ひとつは犯行のほとんどが夜に行われていること。また、殺害には必ずナイフが使用されていること。

そしてもうひとつが、どの殺害現場にも、「仮面」が残されていることだ。このため、犯人は同一人物、もしくは同一グループと考えられているのである。

誰が呼んだか、いつしか付いた名が《悪夢のジャック》。ゴシップ好きのロンドン子たちを恐怖と好奇心で驚つかみにしている、猟奇的犯罪者だ。

そしてまた、ロンドンを賑わす新聞の――特に大衆紙の――格好の「ネタ」でもあった。

「実際、《ストランド・ニュース》にもバンバン投書が寄せられてるんだからね？ おたくの名探偵は一体何をやってるのかって！ 編集長も、アーサー君のコメント取って来いってうるさいし」

そう、《ストランド・ニュース》の若手記者であるマリー・ハドソンは強く訴えた。ちなみに、同紙の人気コーナーである《名探偵コラム》は、彼女が大家の孫という特権を活かし、下宿人のあることないことを面白おかしく書き立てた産物だったりする。

「あいつのコメントなら、幾つかあっただろ。『興味がない』とか『市警の仕事だ』とか」

「あんなやる気のないの、使えるわけじゃない！ 読者が求めているのは、『名探偵』のコメントなんだからっ」

「それは……無い物ねだりというものだろう」

「そこをどうにかするのが、プロの記者ってものよ！」

「いや、プロのジャーナリストなら、真実を伝えるべきでは？」

コナンの率直な意見を、マリーは眼鏡の位置を直し、ハンツ、と鼻で笑う。どうも、青臭い感傷主義と見なされたいらしい。不本意ではあるが、いちいち訂正を求めるのも馬鹿馬鹿しかっ

た。

今回の被害者は若い女性。それもなかなかの美貌の持ち主だったらしく、どの新聞社も報道に熱が入っている。また、遺体が発見されたのがプリムローズ・ヒルと呼ばれる小高い丘のある付近なのだ。ここは高級住宅街にほど近い一方、過去に殺人事件や決闘沙汰の舞台となったこともある曰く付きの場所である。そのため、何かしら記事に繋がるネタはないかと、各紙とも情報収集に余念がないのだ。

と、

バチンッ！

再び隣室から音が響いた。しかも今回は、バリ、ババツ、バツンツと、音が連鎖している。コナンとマリーは無言で顔を見合わせたが、どちらも相手の顔に「関わりたくない」と書かれているのを確認し合うだけだった。

が、次の瞬間、

バン！

と、ひと際派手な爆発が室内の空気を震わせ、ベーカー街222Bを揺さぶった。コナンとマリーは思わず座っていた椅子にしがみついた。

「ちよつと」 これ不味いんじゃないの、コナンに」

「ええいクソツ、あの発明バカめ！」

爆発音が連鎖する中、コナンは立ち上がって、隣室に繋がるドアに向かう。

しかし、コナンがドアノブに手を伸ばすより早く、ドアの方が待ってましたとばかりに隣室側から開けられた。

現れたのは見るからに「怪しい」青年だった。

黒いガラスを詰め込んだ丸眼鏡を掛け、幾つものポケット―その多くはパンパンに膨らみ、あるいは、中身がはみ出している―が付いたエプロンを付け、両手に革製のグローブをはめている。右手に謎の金属棒、左手には金属棒とコードで繋がった謎の金属箱を抱えていた。

黒眼鏡の遮光グラスに覆われているので、目は見えない。

だが、その口元はニンマリと会心の笑みを浮かべている。

「出来たぞ！ 新作の完成だ！」

雄々しく宣言し、謎の青年はずかずかとリビングに押し入った。

テーブルに近付くと、手にしていた金属棒と箱をドカッと置く。マリーが慌てて自身のキャスケット帽を回収したが、そちらには目もくれない。

おもむろに黒眼鏡をむしり取り、

「今回は会心作だぞ？ さあ、見るがいい！」

青年ーコナンの同居人、アーサー・ホームズは、カブトムシを捕まえたガキ大将よろしく、目を輝かせて得意げに言い放った。

「……まあ、そこに置かれれば、嫌でも目に入るが……」

とコナンは自らの言葉通り、嫌そうに顔をしかめる。

「今度はなんだ？ さっきの爆発音からして、いつもより危険度が高そうだが」

「危険？ とんでもない！ 操作さえ正確なら、完璧にコントロールできる。安全そのものさ。逆説的になるが、完璧にコントロールできる安全性の高さこそ、武器に求められる一番の要素だからな」

「武器？」

もう嫌な予感しかしない。視界の隅に、マリーが無言のままテーブルから距離を取るのが映った。

「いいか？ これは言わば、電気の剣だ。こっちの箱が電源で、この剣身が電極になっている。

高電圧を発生させ、電極に触れた相手に痛烈な電気ショックを与えることができるのだ！」

『『できるのだ』じゃない。なんでそんな『危険』な物を作った？』

「さしずめ、エレクトリック・ソードと言ったところかな。略して『Eソード』と命名しよう。とはいえ、これはまだ試作品。次は電源を小型化して一体化ー」

「質問に答えろ！」

コナンが怒鳴ると、アーサーは、えー、とつまらなさそうに眉根を寄せる。

「僕の発明に理由などない。発明とは発想であり、発想とは飽くなき知識欲の果てに訪れる天啓だ。天啓に理由を求めるなんて、ナンセンスだよ、コナン」

「つまり思い付きで作ったということだな」

「それに、繰り返すが危険じゃないぞ？ 刃物なんかより、ずっと死にくくい」

『『死にくくい』？ 実に頼もしい言葉だ……って、待て、アーサー！ なぜそいつをこっちに向ける！？ いま押したスイッチはなんだ！？ 何か凄い音がしてるぞ！？』

「説明するより試した方が早いだろ？」

「だったら自分で試せ！ って、火花！ バチバチ火花が飛んでるじゃないかっ。そのどこが安全だ！？」

「大丈夫だ。電圧は十分低くして……おかしいな？」

「おい!？」

「待って、アーサー君! いまカメラの準備をするからー」

「マリーも、こんなときに記者根性を出さなくていい!」

丸いテーブルを挟んで、右に左に牽制し合うコナンとアーサー。そして、マリーがブリタニア製の最新折り畳みカメラを取り出し、構えたときだった。

ドアがノックされた。

「アーサーさん? あなたにお客様よ? なんでも、《ジャック・ザ・ナイトメア》に関わることで相談したいことがあるんですって」

ドア越しの声が告げる。

三人は互いの顔を見合わせた。

*

依頼人を案内してきたのは、ハドソン家三姉妹の長女、ターナ・ハドソン。マリーとは七歳違いで、物腰の穏やかな、街でも評判の美人だ。

家事を担当しているためメイドのようなエプロン姿だが、それがかえってターナの家庭的な美点にマッチしていた。両親を亡くしたあと妹二人の面倒を見てきたため、いまでも未婚。しかし、彼女との結婚を夢見る男は、ベーカー街だけでも両手の指の数では足りないほどだった。ただ……。

訪れた依頼人の美貌は、別格というしかなかった。当のターナさえほのかに頬を染めて、ちらちらと依頼人を見ているほどだった。

黒い帽子に黒いドレスを着た、二十過ぎと見える女性。

顔にはベールがかかり口元以外は隠されているのだが、それでもなお、彼女が絶世の美女だとわかる。わかってしまう。居住まいそのものに気品があるのだ。ただ椅子に座っているだけで、彼女の華やかさが伝わってくるのである。薄いベールに隠された双眸が、宝石のように輝いて見える気さえした。

妙に胸がざわつく女性だ。コナンは我知らず緊張して、背筋を伸ばした。

一方、アーサーは普段通りだった。

依頼人と向き合う形で暖炉の前の肘掛け椅子に座り、足を組んで肘を肘掛けに置いている。実に対照的なだらしなさである。新作披露の腰を折られたせいかわ、依頼人を前にしながら、どこか不機嫌そうですらあった。

じろじろと依頼人を見ながら、億劫そうに話しかける。

「えー……失礼ですが、ミス……？」

依頼人は小さく頷き、

「アイリーン、とお呼び下さい。代わりに、姓は伏せさせていただきます」

良く澄んだ、それでいて、どこか中性的な声音だった。黒い衣装に覆われる抜けるように白い肌の中、紅を差した赤い唇が、わずかだけ笑みを結んだように見えた。

《『シヤック・ザ・ナイトメア』に関わる』と伺いましたが」

「仰る通りです。まさに、あの忌まわしい殺人鬼に関わることですわ」

「よろしい。ではお帰り頂いた方が、お互いのためですね」

「ちよつ、ちよつと、アーサー君！？ 話も聞かないで、何よそれ？」

取り付く島もないアーサーに、横で聞いていたマリーが思わず口を挟んでいた。コナンも全く同意見である。

しかし、アーサーはにべもない。

「何度言えばわかる？ 僕は無差別殺人の犯人になんか興味も関心もないんだ。というより、そもそも僕が請け負っているのは、依頼主の悩みを僕の発明で解決することだぞ？ 脚を悪くしたという依頼主に馬車より速い乗り物を作り、夜通し勉強したいという依頼主に一年中消えない照明を用意し、か弱い婦女子や非力なお年寄りのためには安全性の高い武器を開発する！それが、僕の仕事だ。犯人を捕まえる？ そんなの、誰がどう考えたって市警ヤードの仕事だろ？」

「……面白そうな相談事なら、喜んで引き受けるくせに……」

「好奇心は発想の種だからな」

マリーの皮肉に、悪びれる素振りもない。

とはいえ、アーサーが言っているのは、彼が最初から公言し続けている主張である。彼はあくまで「自称だが」発明家」なのだ。犯罪事件の解決を望む依頼が増えたのは、手柄ほしさに「名探偵」と囃し立てた某新聞記者の責任だった。

「ともあれ、無駄足を踏ませて申し訳ないが、これ以上貴重な時間を浪費することもありません。お引き取り下さい、アイリーン」

アーサーは椅子から立ち上がり、ドアの方へ手を向けた。

勝手気ままなのはいつものことだが、ここまで素っ気ない態度を取るのには珍しい。どうも、《『シヤック・ザ・ナイトメア』に関してはこれまでも散々けしかけられている分、嫌気が差しているらしい。

コナンはアイリーンの様子をうかがい、自分が取りなすべきかどうか迷った。出過ぎた真似はしたくないものの、このまま彼女を放り出すことには強い抵抗があった。

しかし、

「お待ちください、ホームズさん。私がお願したいのは、あの殺人鬼を捕まえることではありません。私は、友人に送った手紙を回収して欲しいのです」

コナンが「手紙？」とアイリーンの話に意識を向ける。

一方アーサーは、

「友人？」

と、コナンとは違う台詞に反応した。

「失礼ですが、友人だったのですか？ 貴方とミス・クロエ・ノートンが？」

アイリーンの身体が小さく震え、顔に掛かるボールが揺れるのがわかった。

「……驚きましたわ。彼女のことを？ いえ、でも、私と彼女の関係は誰にも……」

アイリーンの疑問に満ちた視線を受け、アーサーは仕方なく肩を竦めた。

「さて、喪章クレシを見当たりませんが、黒で統一した装いは貴方が喪に服している証でしょう。その上、《ジャック・ザ・ナイトメア》に関わるご相談とすれば、その友人は今回の事件の被害者、クロエ・ノートン以外に考えられない」

何でもないように告げる台詞に、コナンはついニヤリとしそうになる。

アーサーは決して『名探偵』などではない。マリーが自身の記事の中で、アーサーのあることないことを脚色しながら作り上げたイメージに過ぎない。

だが、マリーのコラムの中には、「ないこと」だけでなく「あること」も書かれているのだ。もともと、大半は「ないこと」の方なのだが。

「あ、何よ、アーサー君。被害者のこと、ちゃんと調べてるんじゃない！」

「うるさい。新聞に書いてあっただけだ」

マリーが唇を尖らせると、アーサーも嫌そうに顔をしかめた。まるで子供の喧嘩だ。コナンの方が恥ずかしくなってくる。

しかし、アイリーンも気にした様子はなく、

「仰る通りです、ホームズさん」

と、むしろ少し前のめりになった。アーサーの推理を、頼もしく思ったらしい。

「私たちは幼馴染みだったんです。最近はなかなか会えていませんでしたが、でも、ずっと手紙でやり取りを続けていました。なまじ、直接会う相手でなかったからでしょうか。かえってなんでも相談できる、掛け替えのない友人でした。今回の件は本当に……どうして彼女が、こんな……」

揃えた膝の上で、アイリーンの両手が、きゅつと握り締められる。

「それで……そう言った関係でしたので、正直申し上げますと、彼女にはあまり公にはしたくない事にも、相談に乗ってもらっていたのです。ですから、相談した手紙が人目に付く前に、

手元に取り戻しておきたいのです」

アイリーンの訴えに、アーサーはしばらく無言になった。椅子から立ち上がったまま、暖炉の前を短く行き来する。

「……相談事はいつから？」

「三年ほど前からです」

「とすると、手紙はかなりの量になりますね」

「あ、いえ。彼女には、相談した事が解決する度に、その件に関する手紙を処分してもらっていました。ですから、残っているのは、三、四通程度になります」

「すでに彼女の遺族の手に渡っている可能性は？」

「彼女は両親と死に別れ、天涯孤独の身でした。ご遺族と呼べるような方はいなかったはずですよ」

「では、スコットランド・ヤードは？ 何しろ巷を騒がす《ジャック・ザ・ナイトメア》の被害者です。身元は詳しく調査されているはずだ」

「はい。スコットランド・ヤードの方はツテに頼って確認したのですが、幸い私の手紙が押収されたということはないようです」

「なるほど。……しかし、ご自身で直接彼女の家を訪れ、事情を話して回収されるつもりはないのですかね？」

「彼女はよく引越しをしていたので、手紙のやり取りは郵便局の預りで行っていました。私は彼女のいまの住所を知らないのです。それに……」

「それに？」

「……私は、手紙の存在そのものを、秘匿しておきたいのです」

「……」

アーサーは足を止め、椅子に座り直した。両肘を膝の上に置き、両手の指先を合わせて口元に寄せた。

視点が焦点が失われている。彼の頭脳が高速で回転しているのだ。それはつまり、詳細も聞かずに断った依頼を、受けるかどうか再度検討している証拠だ。

「アーサー君っ。この際、犯人逮捕とは別に、依頼を引き受けるべきよ！ その過程で、犯人に迫る手掛かりが得られるかもしれないだし！」

「……マリー？ 一応釘を刺しておくが、公にしない条件なんだから、当然記事にはならないからな？」

「はあっ！？ グッ……け、けど、匿名で行けば、なんとか！」

「駄目だ。諦める」

コナンが無情に言いつけると、マリーはくううと唇を噛んだ。見上げた記者根性ではあるが、もう少し有意義な形で發揮して欲しいものだ。

「あの……報酬でしたら十分な額を用意させて頂きます。半分は前金でお支払いしますし、必要な経費があれば、別途……」

アイリーンが訴えたが、もうアーサーは聞いていなかった。

短からぬ沈黙が、222Bのリビングを支配する。

コナンは不審に思った。依頼を受けるにせよ、受けないにせよ、いつものアーサーなら、その判断にこれほど時間をかけたたりしない。それこそ、その日そのときの気分で決めるような奴である。

何か悩んでいるのだろうか？ だとすれば、いったい何を？

「……アーサー？」

とうとうコナンが、小さく呼びかけた。

コナンが声をかけた瞬間、アーサーではなくアイリーンの方が、小さくピクツと反応した。

次いで、

「わかりました」

アーサーが答え、彼の視線が、依頼人へと焦点を結んだ。

「承りましょう。正直あまり気が進みませんが……そうする必要がありそうです」

*

「びっくりしたわ。ものすごく綺麗な人だったわね」

ため息を吐くように言ったのは、アイリーンを案内したターナだった。さすがに本人がいる場では黙っていたが、彼女を見送ったあと、いの一歩に感想をもらした。

「単に綺麗って言うんじゃないかって、なんだか不思議な雰囲気があって……普通の女の人とは違う気がしたわ。元は貴族の方かしら？」

「うーん、どうか。貴族が地位と身分を捨てて、一市民になったって例もあるけど……」

長女の意見に、次女が首を傾げる。

世に言う《エディンバラの屈辱》のち、ヨーロッパにいた貴族の大半は、新大陸―神聖ブリタニア帝国に亡命している。だが、マリーが姉の意見を否定し切れずにいるのは、彼女もアイリーンに貴族的な気品を感じていたからだろう。実を言えば、コナンもだ。

「それより、どこかの劇団の女優さんって線は？ 凄くミスティアスだったし」

「あら？ 彼女が女優さんなら、きっと大女優よ。有名な女優さんなら、マリーはだいたい知

つてるんじゃないか？」

「海外から来てるかもしれないじゃない」

「そう？ とても綺麗な英語だったけど」

姉妹はきやあきやあと想像を逞しくする。物見高いのは困りものだが、仲が良いことである。

コナンは苦笑しながら、

「アーサー？ お前のことだ。アイリーン嬢の正体が何者か、少しは見当が付いてるんだろ？」

アーサーは、アイリーンが退室したいまもまだ肘掛け椅子に座り、ぼんやりと考え事をしていた。

右手がポケットをまさぐり、愛飲している紙巻き煙草の箱を取り出して、一本を唇に運ぶ。

それから、ちようど手のひらに収まるサイズの、ゴテゴテとした機械を取り出した。彼の自作の電気式ライターだ。

煙草を口にくわえたまま、

「……ターナさんに一票」

と、くぐもった声で答えた。

「へえ？ じゃあ、お前も彼女は元貴族の家系だと思ってるのか？」

「……そっちじゃない」

「なに？」

コナンが聞き返した。

アーサーは手の中でライターを弄び、バチツバチツと火花を散らしながら、

『普通の女の人とは違う』。まさしく、その通り」

「ふむ……で？ 他には？」

「それだけだ」

「それだけ？ 他に気付いたことはなかったのか？ 彼女が今回の被害者と友人だったことは、

見抜いてたじゃないか」

コナンが驚きながら指摘すると、アーサーはじとつと上目遣いでにらみ返した。

「見抜いた？ 馬鹿な。あんな明確なメッセージ、見落とす方がどうかしている。女優？ 確

かに、もし舞台上に立つことがあれば、一躍有名になるかもしれないな。もしくは、たとえ主演

を張ろうと、驚くほど話題にならないか……」

奥歯に物が挟まったような言い様に、コナンは顔をしかめる。

「どういことだ？」

「あの依頼人は『完璧にコントロール』されてたってことさ。まああえて言えば、読み取れる情報すべてが完璧にコントロールされていたという事実こそが、唯一の有意義な情報かな」

説明を求めた質問に返ってきたのは、さらに説明を求めなくなる台詞だった。いよいよもって意味がわからない。

しかし、

「ときにコナン？ 十中八九答えはノーだと思うが、念のため確認しておくぞ。君、アイリーン嬢とは以前にも面識が？」

不意を突く問いに、コナンだけでなくターナとマリーも驚いた顔をした。

「ーいや」

とコナンは戸惑ったまま生返事をする。

「もちろん初対面だ。どうして……？」

アーサーはバチツバチツとライターの火花を散らす。

「……改めてさっきの会合を振り返ってみると、一度だけ、彼女のコントロールが乱れた瞬間があった。部屋に入り、最初に君を見たときだ」

「ど、どういうことだ？」

「……うん。どういうことなんだろうね？」

バチツ、とライターの火花が飛ぶ。

アーサーはそれからしばらくライターを弄んでいたが、最後にもう一度バチツと鳴らして、くわえていた煙草の先に火を付けた。

ゆるりと煙草を吸いながら、

「まあ、いいさ。前金ももらったことだしな。日暮れまでは、まだ間がある。コナン。こいつを吸い終わったら、仕事を始めよう」

*